

花田清輝

隨筆三國志



筑摩書房

隨筆三國志 定價 九〇〇円

一九六九年十一月十五日 初版第一刷發行

著者 花田清輝 © 一九六九

發行者 東京都千代田区神田小川町二一八 竹之内靜雄

發行所 東京都千代田区神田小川町二一八 株式會社 筑摩書房

電話東京二九一局七六五一(代) 郵便番号一〇一—九一 振替東京四二二三

CS 81017 明和印刷 大口製本

目次

蜀犬、日に吠ゆ……………七

怪力乱神を語る……………二四

二桃、三士を殺す……………四

処士横議……………七

良禽は木を選ぶ……………五

燕人燕語……………八

儒生、時務を知らず……………一〇三

説三分……………一二七

飲馬長城窟行……………一三三

豆は釜中に在って泣く……………一四〇

烏に反哺の孝あり……………一四六

擊壤歌……………一五九

装幀・挿画 桂ユキ子

隨筆三國志

蜀犬、日に吠ゆ

蜀犬、日に吠ゆ

「蜀犬、日に吠ゆ。」という。蜀の国は四方をけわしい山々によってとりかこまれ、秋から冬にかけては霧が深く、日の目をみるのが稀なので、たまたま太陽に出会うと、犬があやしんで吠えるのだそうだ。おもうに、その犬は、漢代の土偶によくみかけるような、ピンと立った耳と、大きな口と、まいた短かいしっぽとをもった、いわゆる吠犬べいけんだったであらう。なかには、頸のうしろにふさふさとしたたてがみのある、ちよつと獅子をおもわせるようなただけしいやつもまた、いたかもしれない。成都の墓から掘りだされた土偶のなかに、褐色のうわぐすりをかけられて、にぶい光りをはなっている、そんなどうもうな一対いっついの犬があったが、あれこそ蜀犬のなかの純血種であらう。なるほど、狆ちんの日に吠える図といったようなものもまた、それなりに愛嬌がないこともないが——しかし、あらた

めてことわるまでもなく、犬は大、狗は小、であって、やはり、蜀犬というばあいには、犬のなかの関羽や張飛を連想するのが自然ではなからうか。むろん、ひるがえって考えるならば、「蜀犬、日に吠ゆ。」というのは、蜀の風土的な特色を一言で要約するために、犬をダシにつかっているだけのことであつて、犬そのもののかたちの大小など問題外であるといえばいえよう。にもかかわらず、あえてわたしが、そのかたちにこだわるのは、いまもお、あざやかにわたしの眼底にのこっている、頸から胴にかけて銚をうった革紐でしばられた二千年前のたくましい犬の土偶だけが、かつての蜀の片鱗を、あるがままにつたえているからであらう。いや、単にそればかりではない。「蜀犬、日に吠ゆ。」とは、批評家を侮辱するさいの紋切型のセリフでもあつた。しかし、批評家にもピンからキリまであるのだ。いささか大小にこだわってみたくもなろうというものである。

のみならず、日のほうが、犬にむかつて吠えるばあいもまた、ないとはいえない。たとえばモンゴルにはいった最初のヨーロッパ人の一人であるカルピニの旅行記には、タルタル人は、太陽の昇るときに発するすさまじい吠え声をきかないために、一方の耳を地面にあて、他方の耳をまったくふさいでしまいが、それでもなお、吠え声がかこえてくるので、なかには、ヤケになって鉦や太鼓をたたき、その声を消そうとするものもある、といった

ような意味のことが、れいれいしくかかっている。蜀のばあいは、それほどではないにしても、やはり、昔の旅行記のたぐいには、辺境にたいするそれ相当の神秘化があるのではあるまいか。当時、外部から蜀の国にはいるのには二つの道があり、ひとつは、長安から斜谷、劍閣をへて南下するものと、もう一つは荊州から長江をさかのぼるものがそれだったが、どちらも一路たんたんというわけにかなかったであろうことは、李白に、『蜀道難』という詩のあることによっても、ほぼ、想像がつこう。「蜀道のかたきは、青天にのぼるよりもかたし。」である。山を行けば、ぐらぐらと揺れながら、危うく空中にかかっている蜀の棧道があり、江を行けば、ふれるものを片っぱしから粉微塵にしようと待ち構えている三峽の險があるのだ。宋の陸游の『入蜀記』や范成大の『吳船錄』などにも、いちおう、眼をとおしてみたが、なんという長江のスケールの大きさであろう。イルカのむれが出没し、まるで大ムカデのようなかつこうをして、首をふりふり、景気よく水しぶきをたてながら、流れにさからって泳いでいる。全身緑いろで、ハラの下は真っ赤な、得体のしれない大きな魚が、不意に水面からとびあがることもある。上流からくだってくる筏をみると、長さ五十余丈、広さ十余丈もあって、三四十世帯が同居しており、「妻子鶏犬白碓皆具わる。」といったぐあいである。岸边に数十頭の水牛のむれの遊んでいるところ

もある。そのあたりから、しだいに兩岸の崖が迫ってきて、奇岩、怪石が乱立し、ついに江は変じて峽になる。そして、そのどんづまりの霧の渦まくなたに、ひっそりと蜀の国がしずまりかえっているのだ。蜀の国にある峨眉山がびさんや崑崙山こんろんさんに仙人たちが住んでいるという伝説のあるのも、まんざら理由のないことではなからう。

そういえば、『呉船録』には峨眉山にのぼった記事がのっていた。峨眉山上の草木は、ことごとく世間の普通のものとは異なるということは以前からきいてはいたが、じっさい、自分の眼でたしかめてみると、まさにきいたとおりである、と称して、著者は、あじさいの濃い紫いろのもの、朝顔に似て数倍の大きさのもの、蓼たのいろの薄青いもの、木にまっわって垂れさがっている長さ数丈の苔、高くのびることができずに、うねうねとかさなりあつた塔のようなかたちをした松——等々を忠実にあげていたが、べつだん、記録者の役割を逸脱して、その山を神秘化したいといったような意図はいささかもないらしかった。むろん、標高一万尺以上の高山の植物が、下界のそれと同じものだったら、そのほうが、よほど神秘的にちがいない。にもかかわらず、わたしには、そこにもまた、峨眉山を——ひいては蜀の国全体を神秘化しようとするいっぱんの風潮が、そこはかとなく反映しているような気がしてならなかった。もしかすると、『呉船録』が、比較的そんな風潮からま

ぬがれているのは、著者の冷静な人柄もさることながら、なによりそれが、呉から蜀へではなく、蜀から呉への旅行記であつて、しかもその旅行が夏におこなわれたので、晴れた日が多かったためではなからうか。「蜀犬、日に吠ゆ。」などというところ、蜀の国は、いつも霧の立ちこめたジメジメした国のような感じであるが——しかし、三峡の險をすぎて、万州にいたると、山容がにわかにあたらまり、突然、視界がひらけて、ひろびろとした大平原が千里四方に展開しており、つねに米塩に事欠かず、守るにやすく、攻めるにかたい国だといふので、一名、天府の国と呼ばれているほどであつて、すこしも陰氣くさいところはない。むろん、今の四川と昔の蜀とを、ただちに同一視してはならないであらう。だが、わたしには、茅盾が『見聞雜記』のなかの「天府の国」のくだりで、空からみおろした成都平原を、錦繡だとか、五色の絨氈だとか、大小さまざまな色とりどりの皿をかさねあわせたようだとかいって、おそろしく派手なものとして描きだしているのを見ると、たとえば「蜀犬、日に吠ゆ。」といったふうに、昔の蜀を、ただ、灰いろの一種だけで塗りつぶしてしまふのは、やはり、少々、行きすぎではあるまいかとおもわれる。どうやら蜀の神秘化は、主として、一度も蜀へはいったことのない連中の手によつておしすすめられたらしいのだ。もつとも、蜀は、そのほかにも蚕叢の国ともいわれ、古来、養蚕が盛んであつ

て、蜀江の錦の産地として知られていた。あるいはそのことが、無意識のうちに、茅盾の形容に影響をあたえているかもしれない。

しかし、まあ、そんなことはどうでもいいのだ。『三国志』^{さんごくし}について考えているうちに、ふと「蜀犬、日に吠ゆ。」という文句が、わたしの記憶の底からうかびあがってきたまでのことである。後漢の末におこった黄巾^{こうきん}の乱をキッカケに、群雄割拠となったなかから出現した魏や呉や蜀を問題にする以上、ここらあたりで犬のほうはきりあげて、そろそろ、わたしの視線を、人間のほうに――魏の曹操や呉の孫権や蜀の劉備などに向けるべきであろう。いや、まず、まっさきに、天下三分の計をたて、劉備を助けて、蜀の国を占領した諸葛孔明に注目すべきであった。陸游や范成大の旅行記にもまた、千年の歲月のへだたりがあるにもかかわらず、ところどころに、『三国志』の登場人物に関する記述があったが、いまは、もう、ほとんど忘れてしまった。魏家營が、曹操の兵のたむろしていたところだとか、万里橋が、呉へ行く使節にむかつて、「万里の行、これより始まる。」といった孔明の言葉から名づけられただとか、あるいはまた、蜀と呉とが連合して、小気味よく魏をやぶった赤壁の戦場の正確な位置をどこに求むべきかだとか――要するに、その種の考証らしいものについては、さっぱり、わたしには興味がないのである。もっとも、いまから百

年ばかり前に、棧道をとおって、北から蜀にはいった竹添井々の『さんらんきやうにつき棧雲峽雨日記』には、いくらか心をひかれるくだりがないこともなかった。孔明の死んだ定軍山のすぐ近くの武侯廟には、葛の頭巾くすねのずきんをかぶり、羽扇をもった、おさだまりの孔明の像が祭られていたが、像のかたわらには石琴があった。「長さ一尺六寸余、横一尺、高さ八寸余、上に章武元年の四字を刻す。古味愛すべし。これを叩けば清音を発す。侯の愛撫せしものとつたえらる。」と竹添井々は、その石琴についてかいている。それが、孔明のつねに陣中でも手ばなさなかつたといわれる琴というわけであろう。『三国演義』のいわゆる「武侯、琴を弾じて仲達をしりぞく。」のあの琴である。魏の大軍によって包囲され、万事休すとみえたとき、孔明は、四方の城門をひらかせ、ただ一人、城楼にのぼって、香をくゆらせながら、琴をひきはじめた。その傍若無人なありさまをみて、寄せ手の大将である司馬仲達は、てつきり、どこかに伏勢がいるのにちがいないとおもい、大いそぎで退却したというのだ。人は、そこに孔明の苦肉の策をみるが——しかし、わたしをしていわしむれば、かれは、陳蔡の厄にあつたさいの孔子のヒソミにならつて、生涯の思い出に愛する琴をとりあげ、一曲ひいてみたかっただけのことかもしれないのだ。

石琴にきざまれていた章武元年は、西紀二二一年であつて、劉備が成都を首都として帝

位にのぼり、国号を蜀漢と称した年にあたる。その前年の二二〇年に曹操が死に、その子の曹丕^{そうひ}は、後漢の最後の天子である献帝に位をゆずらせ、洛陽で帝位について、国号を魏と呼んだ。そして、その翌年の二二二年に、孫権もまた、呉王の位につき、やがていまの南京を首都とさだめ、その地を建業と名づけた。つまり、その石琴の誕生と相い前後して、孔明のいっていた天下三分の計は、もののみごとに実現し、文字どおり、三国鼎立^{ていりつ}の時代が——われわれのいわゆる「戦後」と、ひどくよく似た時代がはじまったのである。楽器分類法によれば、琴はツイターに属する。わたしは、第二次世界大戦後、ツイターによって演奏される、アントン・カラスのつくった『第三の男』という映画のテーマ・ミュージックが、全世界を風靡した一時期のあったことをおもいかべないわけにはいかなかった。もっとも、竹添井々の旅行記には、『呉船録』と同様、五月以降の記録であるにもかかわらず、「蜀犬、日に吠ゆ。」というのは、案外、本当なのではなからうかとおもわせかねないものがあるということを、一言、つけ加えておこう。その旅行記の題名によってもあきらかなように、著者は、蜀にはいつてからは、ほとんど晴天にめぐまれず、十日のうち、九日は雨ばかりだといって、「蜀中梅雨なし。」といった范成大の言葉をうたがっている。とすると、やはり、『呉船録』と『棧雲峽雨日記』とのあいだにながれさった千年の